The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	諺歌百首 : バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラに捧ぐ
Author(s)	ミシュラ, プラタープナーラーヤン
Citation	印度民俗研究. 1978, 5, p. 51-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50336
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

諺　歌　百　首

バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラに捧ぐ

プラタープナーラーヤン・ミシュラ

言　上

ここにお目に掛けまするはまこと差上ぐる値なき粗末な品にてございます．世に「お日様に燈火」[1]とか申します．しかしながら，この百粒の薬，印度国民の心をばむしばむ業病の治療にいささかなりとも役立つものと愚考致します．もしこれに諸賢の情深き眼差しを賜るならば，錦上花を添うと申すべき「黄金に香りを添うること」[2]と相成りましょう．さればこそ，「山賤の心の印なる薪に木の葉」[3]をもお受取り下さらんことを伏して願い上ぐる次第にてございます．

敬　白

カーンプルにて

ラーマ降誕日　　プレーマダーサ・ミシュラ拝

ハリシュチャンドラ暦3年（西暦１８８７年）

慈愛溢るる神を拝み
群がる疑念を捨て去るべし
ひたすらに念じ励むならば万事成就す
「あれもこれもと念ずるなれば万事潰ゆ」[4]といえり　(1)

これぞ四聖典（ヴェーダ）の精髄なり
耳底に深く刻むべし
「慈愛の二文字学ぶ者
まことの学者とならん」[5]といえり　(2)

神は時空を超えておわします
四聖地（ダーマ）の巡礼も益なきこと
何故に心眼を開いて見ようとなさらぬか

「抱いた子を村中捜し歩く愚か者」[6]といえり　(3)

四聖典(ヴェーダ)　に　古譚(プラーナ)すべて　暗誦し
呪文，苦行，願行に励み命を捧ぐとも
神に捧ぐる誠心なくばいずこにか悦びを得ん
「吹けば飛び散る虫喰い粒よ」[7]といえり　(4)

慈悲の倉，慈愛の館なる主を疎んじ
悪魔，幽鬼を拝む者が
如何にかかる知恵もて喜び幸せを得ん
「乳(ダヒー)　酪と思いて綿を食い」[8]といえり　(5)

門派に囚わるるならば生死の輪を逃れ
解脱を得んものと悩み苦しむものなり
慈愛の道を歩めば何事にも執着をおぼえず
「やりもとりもせずかかわりもなし」[9]といえり　(6)

負けは負け，勝つとも負けになる者に
説き聞かせるは全く無益なること
針の先ほど習えば天狗鼻，本性は如何ともなし難し
「牛(ギー)　酪を注ぐとも苦楝（ニームの木）は甘くはならず」[10]といえり　(7)

学び励めとあれほど説き教えられたに
民草の苦しみは去らず
のらくら者はいずこにても同じ
「ぐうたら宿六家の内でも外でも」[11]といえり　(8)

如何なる害を被るとも
わが本の姿，わが本の風，わが民の本を
ゆめさげすむなかれ
「とまれ身内は身内」[12]といえり　(9)

露ほどの知恵なき者共が
伴天連(パードレー)の教えに従うなり
異国の風を真似ればついには害を被る

「他所者に口づけすれど唾ばかり」[13]といえり　(10)

おのが利を求めて人に害をなせば
苦海に沈むはこれ必定
ゆめ疑うことなかれ
「なしたるように享くるもの」[14]といえり　(11)

おのが全き力及ばぬに
威厳示すは無思慮というべし
ちとしくじりゃしゅんとなる
「抜け作は人の財物の番をする」[15]といえり　(12)

あの手この手奥の手つかい，おのが望みを果たすがよいぞ
だれかれなしに一様に振舞えば，不快な目にあうものよ
相手次第に振舞うが賢者のしるしなり
「畑を鋤くには盲牛をこき使え」[16]といえり　(13)

恥じらいを捨て
おのが目的果たす者には
かなわぬもの
「往還に額すりつけ情乞いする盗人め」[17]といえり　(14)

兄弟喧嘩の果ては他人の足下にひれ伏す
この骨肉の憎しみこそ
月なるインドを食らう触鬼(ラーフ)なり
「裏切者がランカー国を滅ぼす」[18]といえり　(15)

はらからと争い
神に誠の心抱かねば
いずこにてもあなどらる
「力なければかかあは世間のからかいもの」[19]といえり　(16)

互いに仲睦まじければ
苦労はすべて消え失す
団結に勝れる力なし

「一足す一は十一」[20]といえり　(17)

英吉利人(アングレーズ)はみな奪い去る
我等は口舌の雄
手足動かさず口先だけで何になろう
「雷鳴で魔法がとけようものか」[21]といえり　(18)

わがことはわが手でなすべし
異邦人(バルデーシー)，異教徒(バルダルミー)には一切期待できず
財宝と大地を奪った者がどんなよいことなそうものか
「ヒンドゥー(ジョーギー)行者に友なくムスリム(カランダル)行者に兄弟なし」[22]といえり　(19)

なにはさておき
自主独立を手に入れるべし
その意気持たねば黙して足蹴を受けよ
「王のなすことこれ正義，なにが出ようと賭けは賽の目」[23]といえり　(20)

世故をわきまえねば
読み書き覚えたとてなにになろう
ことごとに物笑いの種となるばかり
「バラモンは本卦帰りしても抜けたまま」[24]といえり　(21)

世に敬まわれてこそ
まこと立派というもの
空威張りしてなにになろう
「家の中ではみなお殿様」[25]といえり　(22)

体力，知力，学問，徳性，それに知識は
すべて神(ハリ)の支配下
まことみじんの疑いもなきこと
「運に恵まれてこそ成功す」[26]といえり　(23)

出家(サンニャーシー)は足るを知るべし
在家(グリヒー)は財を蓄えるべし
手に入れたばかりで有頂点になるは愚か者

「一壺（ガガリー）の麦粉に肩をいからす下司野郎（スード）」[27] といえり　(24)

過って破局を迎えようとも
賢者は努力を怠らぬもの
つぶれた倉の一文に一万の値打あり
「夜逃げ男のふんどしでもとれ」[28] といえり　(25)

なにごとも時を逃さず
正しい手立てを尽くすべし
時機を逸すれば利全くなし
「鳥がついばんでから悔んだとて」[29] といえり　(26)

わき目もふらず書を読み
師友父母に尽くすべし
さればこそ
「栴檀は二葉より芳し」[30] といえり　(27)

友と財とを蓄うべし
これあっての徳と取柄なり
さもなくば知恵も役立たず
「百人の陀羅（ナャンダーラ）も一人の貧乏人には及ばず」[31] といえり　(28)

貞節を守りて
婚家と実家で喜び享けるべし
ふしだら女はいずこにても嘲らる
「一度失えば二度と戻りこぬは誉れなり」[32] といえり　(29)

老いたればあらゆる欲を捨て去り
神の蓮の御足を頂礼すべし
この世のものを信ずるなかれ
「命の限り望みあり」[33] といえり　(30)

力持ちは希望を失わず身を修むるもの
かほどのもので何になる，という者に唾すべし
如何ほどであろうとも光はあるにしかず

「ひま畑では虎の如き猫」[34]といえり　(31)

過ぎ去りし時にとらわれ
今なる時を
潰すべからず
「過ぎしは忘れ去り，先をば思うべし」[35]といえり　(32)

目指す仕事に障りが起きようとも
焦るべからず
倦まずたゆまず努めるならば事は成る
「ばったい(サットゥー)粉たずさえどこどこまでも」[36]といえり　(33)

意気込んで始めながら妨げに
すぐ気力を失う者は
無駄な努力にて恥をかく
「レモンに塩なめへこたれる」[37]といえり　(34)

世間付合いあろうとも
わがことはわが手でなすべし
勇気ある人は名を惜しむ
「水は井戸を掘って飲むべし」[38]といえり　(35)

勤勉なる人，勇気ある人，意志堅固なる人，力持てる人は
自ずと人の上に立つ
これ世間も認めるところなり
「水牛は棍棒を持つ人に従う」[39]といえり　(36)

白く輝き流れるといえども
片や心を清め
片や正気を奪う
「恒河(カンガー)の水と唐綿の汁とは並びようもなし」[40]といえり　(37)

迷いを断ち
面子を捨て怠情を去って
富を手にすべし

「 アシュタカバーリー ダーリドリー
勤勉家に倹約家　いずこにても成しとぐ」[41] といえり　(38)

口先では四聖典(ヴェーダ)を唱えつつ
心では人の財物や女色に執着す
まこと鷺の如き信心の徒よ，幸いなれ
「手には念珠，懐には匕首」[42] といえり　(39)

おのが行い改めず
御高説を撒き散らす
学者面に紳士面，呪われてあれ
「昨日の出家が大智。大覚」[43] といえり　(40)

守るべき道も守らず身を修めず
我執を捨てず愛をひろめず
その上楽を求める愚か者
「何の権限ありて湯をお求めじゃ」[44] といえり　(41)

真実，力量，利益に意を注ぎ
虚名を追うなかれ
偽りの位階にて楽の得られるはずもなし
「足もかなわぬに名は跳雄(クーダン)」[45] といえり　(42)

この上なき印度文字(ナーガリー)を捨てペルシア文字にかぶれるとは
自国のものをうちやり異国のものにいれあぐとは
かような見方，考え方なればヒンドゥーは苦しむが当然
「わが家の中白のどをさし，くすねた黒砂糖舌をとろかす」[46] といえり　(43)

みなが己の殻かぶり
得意になれば
なにもかも話にならず
「銘々のタンバリン，銘々の名調子」[47] といえり　(44)

おのがために励みもせずに
世と仕事を呪う
怠け者の知恵は失せたも同然

「踊りも知らずに床くさし」[48]といえり　(45)

果のよさを見定めて
仕事にかかるが賢者なり
愚者の努力は効なきもの
「めくらが粉ひきゃ犬が食う」[49]といえり　(46)

しかけた仕事はなしとげよ
その後次にとりかかれ
一時にあれこれ考えてはならず
「行者増せば庵荒れる」[50]といえり　(47)

わが家のことを先ず大切に
他人のことはその後に
大聖(マハートマー)はこれなくばそれなしと仰せじゃ
「まずは個我(アートマ)，次に大我(パラマートマー)」[51]といえり　(48)

手足，頭の痛むほど日夜きびしく励んでこそ
富も力も知識，分別，学問も身につくものと知れ
怠ければ気づかぬうちにあとかたもなく消え失せる
「油屋は一滴を惜しみ神(ラヒマーン)は（油入れの）大革袋(クッパー)をひっくりかえす」[52]といえり　(49)

力持たぬに
空しい期待を抱かせ
はぐらかしてはならぬ
「すぐに音を上ぐ旦那(ダーター)よりもしわいがまし」[53]といえり　(50)

官能に身を委ねれば
必ず苦を享く
快楽と病気とは分かち難し
「黒砂糖は耳たぶに飾りの穴をあけてもらう子のみに」[54]といえり　(51)

おのが身も心も財も投げうち
人につくすが人の道
おのが利益のみ追うは賢者のなすところにあらず

「ろばさえも自分の腹は満たす」[55]といえり (52)

限りなき知と徳は胸に秘められてあり
時を失すればこれすべて遣え
決まりたることもとどこおるなり
「天から降るもなつめやしの樹にひっかかる」[56]といえり (53)

友には素直に従え
敵にはあの手この手奥の手あらゆる手を用いよ
それがこの世の幸せな過ごし方
「壁にあわせて絵を描け」[57]といえり (54)

なにごともおのが力量に基き行うべし
力量以上に体裁をつくろい借金してはならぬ
金を借りれば気の休まる暇なし
「商人の挨拶は閻魔大王の伝言」[58]といえり (55)

無駄金遣い
得た名は必ず
信用をつぶすもの
「月夜は四日，そしてまた闇夜」[59]といえり (56)

身心ともに励むでなし
英吉利風にまるまるかぶれ
異人に嬉々と仕う
「果物を食いあさりたる揚句はさんざしの実」[60]といえり (57)

常に弱きに味方すれば
神に愛でられ名をあげようぞ
弱きを苦しむるは徒労なり
「鷲を撃ちて得るは羽のみ」[61]といえり (58)

物腰常にやわらかく
されど曲者には気をつけよ
油断すればつけ入らる

「やさしき顔は犬がなむ」[62]といえり　(59)

世辞をつらねる人は
友にはあらず，我利我利亡者なり
それを見破るは賢者なり
「甘いもの欲しさに他人の食いさしを食う輩」[63]といえり　(60)

先を考えず気ままに振舞う人をば
賢者は違えず愚者に数ゆ
たとい今日は喜び笑うとも明日は必ず苦を享く
「母野羊はいつまで安心しておれるやら」[64]といえり　(61)

苦の種となる弱点は
いともたやすく大きくなるもの
あなどるべからず
「毛布は湿るにつれて重くなり」[65]といえり　(62)

能なき者ははかりごとを大いに好む
口先でつくろい
おのが欠点をかくす
「かめ半分の水はおどりはねるもの」[66]といえり　(63)

瑕なきは神のみ
愚かにもおのがなしたるところを忘れ
他人の弱味を嗤うはまこと不届きなり
「いずれの家にも粘土のかまどあり」[67]といえり　(64)

しばらくは人を惹きつけようとも
欺き通せるわけでなし
化けの皮がはげようものなら到るところで嗤いもの
「警視をやめれば小心者呼ばわり」[68]といえり　(65)

富の酒に酔い痴れるならば
学なく知恵なく思慮なし
夢の中にも愛の道へは進まず

「男おんなの子を生みたるためしありや」[69]といえり　(66)

泣くとも笑うとも
天の定めた通りにしかならぬもの
知者はなぜに涙を流そう
「笑い声ありてこそ家は栄ゆ」[70]といえり　(67)

苦と楽とは
だれにもついてまわるもの
勇気を失うてはならぬ
「心で負けたが負け，心で勝ったが勝ち」[71]といえり　(68)

友の秘めごと詮索するなかれ
互いに意地張り
争い生ず
「かきまぜ過ぎれば毒となる」[72]といえり　(69)

家柄のみにて信ずるなかれ
わきに離れ試し確かめよ
良家にも山ほどの出来損いあり
「わが家の米にわらすべ混ぜる不届者」[73]といえり　(70)

つましく暮らすべし
無駄遣いするは愚か者
「米の飯とお天道さまはついてまわる」[74]という者は
苦しみもだえ命をおとすべし　(71)

交際を引続き願うならば
判断を一層慎重になし
ゆめ遠慮すべからず
「仕事の出来は金次第」[75]というべし　(72)

贈りものは貧しき者に
金持に贈るは失うも同然
それを悟れば知力に忍耐力増すべし

「らくだの口にジーラー（クミンの実）とは」[76]といえり　(73)

定かなるものを捨て
定かならざるものに思い悩むなかれ
この世は楽しく過ごすべし
「死人に解脱が役立つものか」[77]といえり　(74)

他人の言葉に耳を貸さず
おのが仕事に専念すべし
世間のからくりを気にとむるなかれ
「人はみなおのが蒔いたものを刈取る」[78]といえり　(75)

知恵あるものは
臨機応変に振舞うもの
頑固者には幸せ得られず
「腐るとも安売りはせず」[79]といえり　(76)

いささかなりとも役立つと見れば
あきらめるべからず
手をゆるめぬが賢者というもの
「指をつかんだならば手首をつかめ」[80]といえり　(77)

意志堅からずば何事もならず
如何なる訳あろうとも
千万のことを思いめぐらそうとも何もなさざれば
「やはり靴（モーナー）屋は靴（モーチー）屋のまま」[81]といえり　(78)

毀誉褒貶に出会わぬ人ありや
愚者の言葉に苛立つ丈夫ありや
ひとえにこれを信ずるならば道をそれることなし
象は堂々と進みゆく，「犬ころは吠え立てるもの」[82]といえり　(79)

小心のジャッカルは
おのが穴にひそみ死ぬ
獅子は異郷で

「殺したところで食らう」[83]といえり　(80)

この世に起こり得ぬことなし
瑕あるものの瑕も消ゆ
年寄り子供も知るところ
「金槌つぶれて斧となる」[84]といえり　(81)

おのれに害なしと知れば
世間体にも意を払うべし
得にもならぬにあざ笑わるることもなし
「みなが猫というからにゃやはり猫じゃ」[85]といえり　(82)

人一倍働くべし
されど先頭には立つなかれ
下端は仕事にしくじりゃ喧嘩をし
「長(バレー)上はなべに落ちこみ油責め」[86]といえり　(83)

得意にも失意にも
度を失うことなかれ
度を失えば分別の明りは消ゆ
「過ぎたるはよからず」[87]といえり　(84)

好きな人のためにはみな耐ゆべし
されば必ず限りなき喜びを享くるなり
「美味きは己れに苦きは他人に」[88]
というなれば，人を好く器にあらず　(85)

賢き人，礼儀正しき人
品位ある人にこそ
ふさわしき振舞いなり
「高き人に交わるも媚びず」[89]といえり　(86)

天の怒りを招くならば
この地の上に安らかなる所なし
知恵の限りを絞ろうとも

「駱駝に乗ったに犬にかまる」[90]といえり　(87)

おのがなすべきことを人に委ねるなかれ
それを見て如何なる痴者が
口出しするやも知れず
「牛が跳ねずに荷が跳ねた」[91]といえり　(88)

運悪しく失敗したならば
痛みは胸のうちに秘めおくべし
出来る限り人に知れぬよう
「わしが獲物の逃げぬより」[92]といえり　(89)

損多しと知れば
わずかの利益はあきらめよ
分別ある人の避くるところ
「五銭の鳥(ブルブル)に五十銭の羽さばき」[93]といえり　(90)

全滅に臨みても落胆するなかれ
あらゆる術にて備え手を打つべし
これ数多の書の教えるところ
「財を失うと見れば分けて半分をとれ」[94]といえり　(91)

五人が力を合わせれば
難事も
容易になるべし
「五人に一本ずつの薪も一人に五本では荷になる」[95]といえり　(92)

だれの話であれよく聞き
要点を聞きとるべし
だれしも己を大きく見せたがるもの
「結婚式では婿のほめ歌を歌うべし」[96]といえり　(93)

ためになることをやさしく言えば
人の心をとらえるもの
同じこともきびしく言えばあなどり招く

「歯に衣着せねばうとまるる」[97]といえり．(94)

先人の言にあり
「天は徳と不徳とを混ぜ合わせたり」[98]といえり
されど，分別の眼持つ人には見ゆるものなり
「ほこりにまみれても黄金は光る」[99]といえり　(95)

徳や知識を授かる際に
利口ぶってはならず
さもなくば評判おとす
「飼主にニャーオと目をむくとは」[100]といえり　(96)

よき交りに時を費すならば
何事にも上達す
なにもかも教えてくれる人があるでなし
「警視の仕事は椅子に教わる」[101]といえり　(97)

おのがため
家がため国がため
なすべきことあらば
「明日の仕事は今日，今日の仕事は唯今」[102]といえり　(98)

如何なる人が如何様にあろうとも
きびしい言葉は用いぬこと
何事も本人の運次第
「良く言うて損することもなし」[103]といえり　(99)

この世では
手をこまねいて
坐してはならず
「深き水に入りて求めたる人のみ手に入れたり」[104]といえり　(100)

ここにやつがれプラターブ
世に知られたる諺を
選り集め歌うた次第

「人それぞれに願いに応じたる果を得る」[105] といえり

善哉善哉

〔訳者あとがき〕

以上は次を訳出したものである。 Paṇḍit Pratāp Nārāyaṇ Mishra, Lokokti Shataka, Khadgavilās Press, Paṭnā, Pratham Vār, 1896 (Harishcandrābd 12)

諺の本質に関る制約のため訳出にあたっては，可能な限り意訳よりも直訳により原文の表現の味わいを活かすよう工夫した．諺以外の部分が意味及び用法をかなり説明しているからでもある．序文に見出されるものも含め諺すべてに一連番号を付し，ナーガリー文字による検索ができるよう下に索引を掲げた．ただし，これら著者の数えた諺をすべて諺の範疇に含めるには異論があろう．たとえば，諺 (3) 及び (98) はそれぞれ Tulasīdāsa の 'Rāma Carita Mānasa' の一節 ((3): Ayodhyā Kāṇḍa 251 − 1, (98) : Bāla Kāṇḍa 6 − 2) である．なお，諺 (87) のバレー (bare) は「長上，上位の人」と「豆粉を用いた料理の一」とにかけた掛詞である

訳出にあたって Dr. L. D. Malaviya に御助言をいただいた．ここに感謝の意を表する．

諺 索引 (デーヴァナーガリー字母による)

( ) 内の数字は訳文中の諺の一連番号

Ãgurī pakarat pahũcā pakarai (80)

Aṇḍan ke ban mẽ bilārui bāgh hot hai (34)

Att bahut acchī nahĩ hotī (87)

Adhjal gagari chalakat jāy (66)

Apan peṭ gadahau bhar let (55)

Apnā ullū kahĩ na jāy (92)

Apnā phir bhī apnā hī hai (12)

Apnī apnī ḍāphlī, āpan āpan rāg (47)

Apne ghar ke rājā sab haĩ (25)

Aṣṭkapārī dāridī, jahẽ jāy tahẽ siddhi (41)

Ãkhin dekhe cet nā mukh dekhe vyohār (89)

Ãdhar bail bhẽwāy ke jotā jāt hai (16)

Ãdhī pīsai kuttā khāy (49)

An kā cūme mũh bhar lār (13)

Apan bawā lunai sab koy (78)

Īdhana pāta kirāta mitāī (3)

Utrā sahnā mardak nãw (68)

Us dātā se sūm bhalā jo jaldī dey jawāb (53)

Ũṭ ke mũh kā jīrā (76)

Ũṭ caṛhe par kūkur kaṭaĩ (90)

Ek ek mil gyārah hoy (20)

Ekai sādhe sab sādhai, sab sādhe sab jāy (3)

Kaniyẽ larikā gãw guhāri (6)

Kahũ ṭaṭkan gājaĩ ṭartī haĩ (21)

Kālhi karante āj kar, āj karante abb (102)

Kālhi ke jogī māī māī (43)

Kis birte par tattā pānī (44)

Kuwẽ khodi kai pānī piyai (38)

Kūkur bhũkai karat haĩ (82)

Kharī kahaiyā dāṛhī jār (97)

Kharī majūrī cokhā kām (75)

Gangā madār kā kaun sāth (40)

Gagrī dāni sūd utānā (27)

Ghar kā bhediyā lankā dāhu (18)

Ghar kī khānd khurkhurī lāgai corī ka gur mīthā (46)

Ghar ke dhān payār milāe (73)

Ghar ghar maṭṭī ke cūlhe haĩ (67)

Calai na pāwai kūdan nām (45)

Cār dinā kī cãdnī, pher ãdherā pākh (59)

Cautarā āpahī kutāwalī sikhā letā hai (101)

Chũch pachoṛe uṛi uṛi jāy (7)

Jab lag swāsā tab lag āsā (33)

Jahã māraĩ tahã khāhĩ (83)

Jin dhũdhā tin pāiyā, gahire pānī paiṭh(104)

Jis kā byāh usī kī gīt (96)

Jihi kai lāṭhī tihi kai bhainsī (39)

Jūṭh khāy mīṭhe ke lālac (63)

Jaisā karai so taisā pāwai (14)

Jaisī jākī bhāvanā, taisī tākī siddh (105)

Jaise kāntā ghar rahe taise rahe vides (11)

Jogī kāke mīt kalandar kehi ke bhāī (22)

Jo gur khāy so kan chidāwai (54)

Jo dhan dekhie jāt, ādhā lījai bãṭ (94)

Jyõ jyõ bhījai kāmari tyõ tyõ garuī hoy (65)

Ḍhāī akshar prem ke, paṛhai so paṇḍit hoy (5)

Telī jorai parī parī rahimān luṛhāwai kuppā (52)

Damaṛī kī bulbul ṭakā halāl (93)

Dahī ke dhokhe khāy kapāsu (8)

Dhãse dhãse ghan kulharā hoy (84)

Nangā parā bajār mã̃, cor balaiyā lei (17)

Nãci na āwai ã̃gan ṭeṛh (48)

Ninbuā non cāṭi kai rahige (37)

Ninbare kī juiyā sab kai sarhaj (19)

Nīm na mīthī hoy ju sĩcau ghiw te (10)

Par dhan bãdhaĩ mūrakhcand (15)

Pahili ātmā phir paramātmā (51)

Pãc kahai billī to billī (85)

Phir pachitāe kyā huā jab ciriyā cug gaĩ khet (29)

Pher wahī mocī ke mocī (81)

Bakurā kai mahatārī, kab lag kusal manāī(64)

Bakulā māre pakhnā hāth (61)

Baṛe karāhī mẽ paṛte haĩ (86)

Bani āe kī bani āī hai (26)

Bahut mathe phir biṣ nisarat hai(72)

Bahutai jogin maṭhī ujār (50)

Bãdhai marai ki ṭakā bikāy (79)

Bāt gae kachu hāth nahĩ̃ hai (32)

Bidhi prapanc gun augun sānā (98)

Bītī tāhi bisār de, āge kī sudhi ley (35)

Bail na kūdā kūdī gaun (91)

Brāhman sāṭh baras lag po̅g (24)

Bhalā kahe kā jāy (103)

Bhāge bhūt kī la̅gotī hī bahut hotī hai (28)

Bhīt dekhi kai citr urehai (57)

Man ke hāre hār hai man ke jīte jīt (71)

Mare mukti kehi kāj (77)

Mīṭhā mīṭhā gapp, kaṛwā kaṛwā thū (88)

Merī billī mujhī se myã̃w (100)

Rājā karai so nyāw hai, pã̃sā parai so dāw (23)

Rām khabariyā lebai karihaĩ (74)

Lenā ek na denā doy (9)

Vyauhare kī rām jam kā sãdesā (58)

Sab phal khāy dhatūran lāge (60)

Sarag te girai khajūr mã̃ aṭkai (56)

Sāt pãc kī lākarī ek jane kā bojh (95)

Sūdhe kā mũh kuttā cāṭai (62)

Sūraj ko diyā dikhāne se kyā (1)

Setuā bãdhi kai pāche parau (36)

Sonā dhūl mẽ bhī camkai hai (99)

Sone mẽ sugandh hai (2)

Sau candāl na ek kāgāl (31)

Hāste hī ghar baste hāi (70)

Hāth sumirnī bagal katarnī (42)

Hijṛo ke kab laṛkā huwā (69)

Hot biraunā cīkan pāt (30)

（訳　古賀勝郎）